

不抗^{ふこう}な者たち

一

水滴がしたたる傘を閉じ、濡れた革靴が渴くのを待たずして、男は場内の廊下を駆けて行く。

「田中大成^{たなかたいせい}儀葬儀場」そう書かれた看板のすぐ側には、年配の老夫婦が俯きながら立っていた。

「この度はお悔やみ申し上げます」

早口だったせいか、マスクの内側には唾がとんだ。男は居心地悪そうにしながら名簿^{ひのした}に「日下幸成^{ゆきなり}」と素早く記す。そうして袱紗から二万円の入った香典袋を取り出し、遺族に差し出し終えると、スタスタと急ぐように会場内へと入っていった。

既に五十人ほどが入場を終えている。皆の悲観に満ちた顔つきが「田中大成」の生前の人柄を示しているようだった。男もまた沸き上がる想いを必死に押さえ込み、小さく身体を震わせた。

お坊さんが経をあげはじめても、鼻を吸る音や、抑えきれないうめき声が、場内のあちこちから聞こえてくる。故人と向き合う最期の機会である花入れに至っては、その棺に縋りつく者まで現れた。男もまた、一輪の花を片手に故人の下まで歩み寄る。生涯の幕を閉じた故人の顔を、目を見開いて眺めた彼は、心の中でこう呟いた。

『ああ。こんな顔だったのか』

ただ写真で見ると、実際に顔を合わせるのでは、印象は異なるものだ。男にとってはこれが田中大成との初対面である。それでも、男は名も知らぬ花を故人の顔下に添えて、手を合わせていた。そんな時、花入れを終えたばかりの少女が、男のズボンを引っ張った。

「ねえおにいちゃん、どうして手をあわせながら、目をひらいているの？」

少女の問いに、男は少しの間を空け、柔らかな口調でこう答えた。

「だって、最後の瞬間まで彼の顔を見続けていたいじゃないですか」

「……ふうん」

少女は小さく頷いた後、「あ」と声を上げ、彼の口元を指さした。

「マスク、ちょっとだけズレてるよ」

「ああ、ありがとうございます」

目元まで上がっていたマスクを元の位置に戻しながら、男は小さく頭を下げた。

「いやまあ、自宅ですが……だってこれ、固定電話ですよ？」

「ああそうだったな！ 何度お前の携帯電話に掛けても通じなかったからな！」

強い口調で責めてきたのは、日下の「バイト先」の上司である。鞆の中の携帯電話を取り出すと、確かに不在着信が何件か表示されていた。どうしようもない高揚感に包まれていたため、気付くことができなかったようだ。

「仕事を終えてすぐに帰ったんだろう？ 遺族の方がお礼を言い損ねたからと、こちらに連絡が着ていたんだぞ」

「はあ。すみません。……ですが仕事は問題なくこなしましたよ」

「それはそうだが……ああもういい。それよりもお前、今回も香典袋に二万包んだそうだな。私たちは空のモノを渡すだけで良いと何度言えば」

「ああそうでしたね。はい、すみません」

日下はそこで「プツン」と電話を切った。せっかく高揚していた身体が生ぬるくなっていく、その感覚が面白くなかったのだ。

「葬式代理出席」……遺族の依頼により、故人との生前の関係の有無に関わらず葬式に参列するサービスのことだ。日下幸成はその運営会社で、代行スタッフとしてアルバイトを行っている。

葬式代理を依頼する理由は人によって様々であり、親戚の目などを気にして数合わせを依頼する者もいれば、とにかく賑やかに故人を送り出したいからと依頼する者もいる。しかし日下がそこで働く理由は、ただひたすらに己の欲望を満たすためである。代行スタッフとして各地の葬式を巡り、故人や参列者たちの不幸を、自らの幸福の糧にしていた。

日下は胸元のポケットからメモ帳を取り出し、予定表を確認する。

「明日は、昭島市だったな……」

日下はメモを見ると、徐に財布の中から二万円を取り出し、机の上に置いてあった香典袋と袱紗でそれを包んだ。本来、葬儀代理出席において、香典を差し出す必要はない。依頼者の体裁を保つため、空の香典袋のみを差し出す場合がほとんどだ。しかし日下は葬儀代理出席の仕事を始め、二年経つが、欠かさずこれを遺族へと差し出している。なぜなら「香典」とは彼にとって言わば「免罪符」なのだ。他者の不幸を、自らの糧にする「罪」に対しての。

そうして次の葬儀に備えていた際、「ピンポン」と、間の抜けたインターホンの音が部屋に響いた。日下は慌ててマスクを付けて、モニターを介し外を見る。

「……ん、国崎か？ どうしたんだい、もう午後の六時を過ぎているぞ」

画面の先では、日下幸成の唯一の友人である国崎真仁くにさきまひとが、眉間に皺を寄せながらこちらを睨んでいた。

「今日スーツ姿のお前を見かけてな、日下……話があるんだ」

日下と国崎は、リビングで生姜焼き弁当を囲みながら夕食を共にした。弁当に関しては国崎が手作りで持参したものだ。曰く「突然押しかけたうえに手ぶらなのは気が引けるから」だそうで、その妙な律儀さに日下は苦笑いした。

国崎真仁はこの世で唯一、日下の秘密を知っている男である。というよりは、強引に暴いたという方が正しいが。とにかく、人の不幸を快樂とし葬式を巡る、日下幸成の性質を理解していた。それゆえに国崎の前であれば、日下はマスクを外していられる。

「……で、いつまでこんなことを続ける気だ？ もう三十手前だぞ」

しかし理解と納得は別物なようで、彼は「日下を真つ当な人間にすること」こそが、友人としての責務であると考えていた。そのため日下は時折、彼から手厳しい説教を受けている。裏を返せば、国崎はそれ程までに日下のことを心配していた。それゆえに、日下も国崎を鬱陶しいと思うことは多々あれど、縁を切ろうとしたことは、これまでに一度も無い。

「……現代は多様性を主張しているので私のことも肯定してください」

日下はわざとらしい敬語を使いながら、国崎のグラスにウイスキーを注ぐ。早々に酔い潰してやろうという魂胆だった。そんな目論見とは裏腹に、国崎はグラスに手を伸ばすことなく、真つすぐな目で日下のことを見つめていた。

「多様性という言葉があちこちで主張される度、言葉の重みが徐々に失われていっているように思うんだ。お前がその言葉を逃げ道として使うだけなのは感心しないぞ」

遠回しに「お前みたいなやつが多様性を主張するな」と返された日下は、しばらく何も言わずに生姜焼きをもごもと頬張っていた。そして返す言葉をまとめ終えたタイミングで、ゴクンツとそれを呑み込んだ。

「……しかし、しかしだよ国崎。そもそも私が一体だれに迷惑をかけたと言うんだい。私は法的に認められた仕事を行っているにすぎないんだ。それに香典袋に包んだ二万円は、老夫婦の生活の足になっていることだろうよ。そのための金も私は自分で稼いでいる訳だしね」

日下の生活は株式投資による莫大な利益によって支えられていた。そうすることで「葬式代り出席」として働く時間を増やしているのだ。香典として毎回二万円を包むことができる理由

もそこにある。因みに上司に何度小言を受けようとクビを切られないのも、その出勤率の高さに起因していた。

「香典に関してはお前が勝手に設けた免罪符だし、快不快の話をするのなら、友人が倫理に外れた行いをしている俺の気分が害されている」

「自分で暴いたくせに」と日下は内心で愚痴をこぼす。

「それに今は何も害していなくとも、こんなことを続けていれば、お前が堕ちるところまで堕ちる可能性だってあるだろう。俺はそれが怖いんだ」

こうまでして一歩も引かない国崎に対し、日下はいつそ開き直って薄ら笑いを浮かべてみせた。

「全く、君は私が可哀想だと思わないのかい？　こんなことでしか心の奥を満たせない社会不適合者のこの私が」

少しばかりおどけた口調のその言葉に、国崎は小さくため息を吐いた後、

「まあ、哀れだとは思うよ」

たった一言そう告げて、彼はようやくグラスを手を取った。

『『哀れ』、ねえ……』

酒にめっぽう弱い癖、出されたモノは決して残さない律儀な友人は、あれから早々に寝静まった。そんな彼の寝息を聞きつつ、日下は先ほどの言葉を噛みしめる。

「でもね、国崎……私は今の方がよっぽど充実しているんだよ」

指をさされて侮蔑される日々よりも。自分を押し殺して笑わず生きる日々よりも。今の方がずっと、彼にとって、生きる意義のある日々だった。

二

次の日。日下は昭島市の葬儀場へと出向いていた。「吉田金光儀葬儀場」そう記された看板の前には、神妙な面持ちをした遺族が立っていた。葬式代理出席の依頼者でもある。

「この度はお悔やみ申し上げます」

そんな定型文を口にして、名簿に「日下幸成」と記す。そうしていつものように二万円を包んだ香典袋を遺族に差し出し、はやる気持ちのままに、葬儀場へと足を踏み入れた。

式は早々に始まった。経に混じった誰かのすすりなく声が、日下をどうしようもなく高揚させる。葬儀が終盤に差し掛かると、皆が彼の棺の下へと集まった。皆、顔をくしゃくしゃに歪ませながら、故人との別れを惜しんでいる。そんな彼らの姿を見て、日下のマスクが僅かに歪みだす。ドクンと音を立て高鳴っていく心臓や、火照る身体に高まっていく体温が、彼にこのうえない生を実感させた。この瞬間のために、こんな生きづらい世界で必死に呼吸を続けているのだと、心の底からそう思えるほどに。そうしてマスク越しに口元を抑え、漏れかける歓喜の声を押し殺し続けていた、そのときのこと。

「……ん？」

日下は右腕に妙な感触を抱いた。見ると、隣に座っていた老婆が、彼の服の裾を掴んでいたのだ。

「これ、どうぞお」

老婆はそう囁くと、日下にハンカチを差し出した。

「さっきから身体を震わしていらしたので、つい、ねえ」

どうやら、震えている姿を見て、泣いているものと勘違されたようだ。日下は咄嗟の出来事に戸惑い、いつの間にかハンカチを受け取ってしまったていた。

「えんりょうなく。お気持ちは痛いほど、分かりますからねえ」

仕方なく、既に湿っていたそれで、流れてもない涙を拭ってみせた。ただ目元をかすめただけのハンカチは、ほんのりとした痛みを肌に与えた。

「お優しい方なんですねぇ……まるでカネミツを見ているみたいだよ……」

声を震わせながらも微笑む老婆の姿に、日下はハッとした様子で、すぐにハンカチを差し返した。人の不幸を喰いものにしようとも、人の善意を踏みにじる趣味は無い。すすり泣く老婆を見て疼く身体が、果たして高揚故なのか、今の彼には分からなかった。

その後、葬式は滞りなく終わった。時刻はちょうど正午になったばかり。

「んー……」

帰り道、どこか煮え切らない思いを抱えていた日下は、たまらずポケットに入れていた箱から、煙草を取り出した。外出中にマスクを外すことに抵抗感があったが、それでも我慢ならなかったのだ。彼は自らが吐き出した煙が寒空へと溶け込んでいく様を、ただぼんやりと眺め続けている。するとその頭に、ポツンと水滴が垂れた。

「……あ」

予報にない雨が降り出したのだ。降り注ぐ雨粒が、髪を伝い煙草の先端へと零れ落ちた。シユツと情けない音がして、煙草から色が消えていく。ただ白い筒になり下がったそれを、日下は出来たばかりの小さな水たまりへと放り捨てた。次の煙草を吸おうにも、箱の中は既に空っぽだった。

「あー……」

次第に身体中が痒くてたまらなくなつていった彼は、マスクを口元へと戻し、近くのコンビニへと向かうことにした。冷たい雨によって、葬儀で火照った身体が冷めきることはないように、棺に縋りつく参列客たちの顔を思い出しながら。

店内に入ると、煙草や傘を買うより前に、お手洗いへ駆け込んだ。そして鏡の前に立つやいなや、ただひたすらに、自らの顔を凝視した。

⋮

耳元に迫るほどに口角を上げた化け物が、今もなおはつきりと映っていた。目下はそんな自
らに対し、どこか、ひどく安心していた。

コンビニで傘と煙草を購入し終えた日下は、家まであと少しのところにある長い坂を上がつていた。そんな彼が再度煙草を吸いつつ、先ほどの自分について思いめぐらしていた、そのときのこと。

「わああああああああああ！！」

自転車に乗り、ものすごいスピードを出しながら坂を下っている、おおよそ十五歳ほどの少女を見かけた。

「た、たすけてくださいませええええええ！」

少女は日下の横を素通りし

「わあああああああああ！」

進行方向の先にある公園に入り込み

「誰かああああああああああ！」

池の前の柵に衝突し、そこで自転車は止まるも

「わっ？ うわあああああああああ！！！」

少女の身体は宙へと放り出され、

「わああああああ……」

そのまま「バシヤン」と大きな音を立てて、池の中へと沈んでいった。

「……?……?」

日下はとりあえず、「コクン」と首を横に傾げて見せた。

「……!」

突然の出来事を脳が処理しきるまでに五秒を有し、その後日下はようやく柵の下まで駆け寄った。

「……う、うわああん」

そこで、柵を掴んで池から浮かび上がり、弱い声で泣きじゃくる少女の姿を見た。彼女は全身びしょ濡れで、細い身体を震わしている。その様は日下の目に、あまりにも哀れで不幸に映った。

「はは。ははは。はは」

少女には聞こえないほどの微かな笑い声を漏らしながら、日下は少女へと手を差し伸べる。吊り上がった口角は戻りそうに無かったが、見られなければ問題はないと判断したのだ。

「きみ、大丈夫かい?」

つまりこのときの日下は忘れていた。煙草を吸っている最中に少女とすれ違った自分が、マスクを外したままであるということに。

「あ……」

普段より自分の声の通りが良かったことから、日下は自らの失敗に気が付いた。目の前の少女には、池に落ちて泣きじゃくる自分を見て、不気味に囁く男の顔がまざまざと映っていたということになる。日下は何とか口角を下げようと努めるが、思ったように動かなかった。

「……」

そんな日下を見て、少女は。

「……ふふっ」

それはそれは屈託なく微笑んだ。

「わたくしは小麦小夜子と申します。この度は手を伸ばしていただきありがとうございます！
た！ とっても助かりましたわ!」

小夜子と名乗った少女は、びしょびしょになった緑のズボンの両腰に当たる部分をつまみ上げながら、ゆっくりと頭を下げた。その所作と「わたくし」という一人称から、所謂「お嬢様」に憧れがあるのだろうと日下は考えた。というより、他に触れるべきことがあったので、そんな風に強引に理解して話を進めていった。

その後、日下は小夜子を引き上げて、ひとまずはケガの有無を確認した。残念ながら、もとより幸いなことに、彼女は目立つケガを負ってはいなかった。その間にひっそりとマスクも付け直したのだが、彼女は先ほどの日下の表情についても、全く触れる様子を見せずにいる。結局、突然の出来事の後で、他者に気を配る余裕は無かったのだろうと日下は結論付けた。

「一体何があったのですか？」

そう問われ、「うーん」と頭を唸った小夜子は、先ほどの出来事をこう語る。

「突然の雨でツルツルになった道路にタイヤを持っていかれて、そのまま意図せず坂道を下ることになり、勢いづいた自転車を止めようにもブレーキは効かず、そのまま池にバシャン！という具合ですわ！」

「何というか……四コマ漫画みたいなテンポ間ですね」

妙なお嬢様口調も相まって、日下の目には、もはや彼女がギャグ漫画の登場人物のように見え始めていた。

「まあ、何というか、お気の毒でしたね」

「はい！　ありがとうございます！」

「……はい。どういたしまして。それでは私はこれで」

これ以上関わる必要もないと、日下が踵を返そうとしたとき。

「待ってくださいませ！」

小夜子に服の袖をグツと掴まれた。びしょびしょの手で、葬儀用のスーツを。

「……何でしょうか」

「わたくしを病院まで連れていってくださいませ！」

「既に十分元気そうですが」

彼女はなおも、日下の袖をぎゅうううつと握りしめている。思い切り、力強く、しかも両手で。

「いいえ！　か弱い女性ですわ！　元氣なんてありませんわ！　連れて行ってくださいませ！　それにケガだって素人の目で判断できる程度には限界がありますわ！　念には念を、ですわ！」
あからさまな嘘と明らかな正論を言い混ぜたその言葉に、日下は遂にお手上げした。

「分かりました。一緒に行きましょうか」

それは親切心から出た言葉では無かった。ただ彼女の不幸を自らの快樂として消化した分の、借りを返そうと思つてのことである。

「わあ！　ありがとうございます……あ、でも先に自転車を返しにいきませんと。この自転車レンタルなので……くしゅん！」

十一月に池の中に落ちて冷えない訳もなく、小夜子は寒さに身震いした。

「最低限、身体を拭いた方が良さそうですね。すぐ近くに私の家があるのでタオルを取ってきます」

「か、重ねがさねありがとうございます。お供しますわ！」

小夜子の自転車は無料でレンタルした物らしく、身体を拭き終えた二人は、その貸し出し所へと向かつていた。日下は右手で自分と小夜子を覆うように傘を差し、小夜子は両の手でせつせと自転車を引いている。あれほどの勢いで柵に激突した自転車だったが、特に破損している様子もなく、問題なく動いていた。「そもそもどうして雨の中をサイクリングしていたのか」と日下が問うと、小夜子は「雨は予定外のことでしたの！」と返した。確かに予報にない雨だったが、それにしても不幸な少女である……などと日下が考えていると、小夜子は足を止めて、何かを訴えかけるように日下を見つめていた。

「どうかしたのですか？」

「お兄さん……そのお……喉が渴きましたわ」

小夜子の指さす先には、赤い自動販売機があった。「この人図太いな」とは思いつつも、これも彼女の不幸を食いものにした代価を支払うためと、日下は領いた。

「仕方ないですね。何になさいますか？」

「アップルティーが良いですわ！」

お嬢様キャラ故なのか、どこことなく上品なチョイスだった。しかし日下が自動販売機の前で何度そのボタンを押そうとも、反応は無い。よく見るとボタンの端が赤く点灯していた。

「どうやら売り切れのようですね」

「それならレモンティーで！」

「分かりました……あれ？ こちらも売り切れですね」

「ではストレートティーを！」

「……えっと、それも売り切れです……」

「ん〜！ なら緑茶でも！ 水でも！」

「……全部売り切れです」

最終的にはお嬢様キャラを投げうった小夜子渾身のリクエストも虚しく、赤い自販機の全てのボタンが赤く点灯していた。

「……あ、いえ。種類だけ残っていますよ。ほら、右端のブラックコーヒーが」

「わたくし、コーヒーだけ飲めませんの。苦いですが……」

小夜子はガクつと肩を落とし、雨に濡れたアスファルトの上にへたり込んでしまった。

「こんなこともあるのですね」

「……わたくし、世界一不幸な少女ですので」

何気ないその一言でさえ、ここまでの積み重ねもあつてか、一概に冗談だとは思えなかった。

日下は口角を少しだけ上げて、彼女の不幸体質に内心で心躍らせる。

「……？ 何故、私の顔を見つめているのですか？」

そんな日下の顔を、小夜子は首を伸ばし、覗き込むようにしてじっと見つめていた。

「ふふっ……いいえ！ なんでもありませんわ！」

結局理由は分からずじまいだったが、先ほどまで意気消沈していた小夜子は、いつの間にかご機嫌になっていた。

その後も、公園の給水所が壊れていたり、水たまりの上を通りすぎた車によって二人まとめて泥水に塗れたり、散々な道中だった。その度に小夜子は悲観して、その様に日下は悦楽を覚えていく。そしてその間に、小夜子は何故か毎回元氣を取り戻していた。

何とか自転車を返し、小夜子を病院へ送り届ける頃には、雨は止み、日が暮れていた。

「本日はありがとうございました！ お兄さん！」

病院のドアの前で、小夜子は日下に頭を下げた。出会ったときのように、緑のズボンの端をつまみ上げながら。

「後は一人で大丈夫なんですか？」

「はい。もちろんですわ！」

胸を張り「ふふん」と息巻く元気な彼女を見て、やはり自分が必要無かったのではないかと日下が疑問を抱いていた際に、背後から突然、小夜子の名を呼ぶ声がした。

「小夜子ちゃん！ また病院を抜け出して、どこに行っていたの？」

見ると、白い看護服の女性が息を切らし、病院の外から、こちらに駆け寄って来ていた。

「……ん……？」

日下はその看護師の言葉に違和感を覚えた。「ケガがないか確かめるために病院を目指していたのではないのか」と、小夜子に問いかけようとしたが、既に彼女は側にはいなかった。よく見ると、病院の自動ドアの先で、笑顔で手を振っている。

「……あ、あの貴方は？ 小夜子ちゃんとういった関係で？」

残された日下は、看護師から不審な目で見られ、問い詰められる側になった。

「……坂道を滑り落ち、そのまま公園の池に落下した少女に頼まれて、この病院まで付き添っていたところです」

言葉にすると、そこはかたなく嘘くさく、犯罪臭が立ち込めてくる。日下は先に消えた小夜子を恨めしく思った。

「ああ、またそんなことになっていたんですね」

しかし存外怪しまれることなく、寧ろ彼女は納得したというように頷いた。

「あの手この手で病院を抜け出すから、とても困っているんです。いつもどこかしらを怪我したり、汚したりしてくるから尚更に……」

やはり小夜子は入院患者で間違いないようだ。それも看護師にとっては最悪の患者である。

不幸体質にアグレッシブさを掛け合わせた少女を請け負う病院はさぞ大変なことだろうと、日下にしては珍しく、目の前の女性に同情した。

「……あ、あの、良ければこれからも彼女のこと、気にかけてあげてくださいね」

「？ ええ、まあ、機会があれば……？」

それは身元も知れない男に対して、ずいぶんと不用心な頼み事だった。

「だって、遠目でしたけど、小夜子ちゃんのあんな笑顔、私は初めて見たんです。普段は無表情で、最低限の会話しかしないような子なのに」

「……え？」

「今日みたいに外へ抜け出すとき以外は、待合室用の絵本を勝手に入院室にため込んで、一日中それを読んでいるような子なんですよ」

看護師の言葉と、日下の記憶の中の小夜子は、あまりに一致しなかった。首を傾げる日下を見て、看護師は考えるようにした後、「本当は絶対に秘密にしなきゃなんですけど」と、日下に耳打ちした。

「小夜子ちゃん、余命があつて、もう一年も残されていないくらいなんです」

彼女は「だからどうか、少しでも良いから側にいてあげてください」と続けて、院内へと駆けて行った。それを聞いた日下は、ただ病院の前で茫然と立ち尽くすことしか出来なかった。

そんなとき、とある光景が日下の脳裏をよぎった。そこには何故か、今日の葬儀でハンカチを差しだしてきた老婆の姿が映っている。

「……………あ、れ？」

そしてようやく気が付いた。小麦小夜子の最大の「不幸」を知った自分の口角が、ピクリとも動いていないことに。

四

奇妙な少女と出会ってから丁度一週間が経った日の昼間。日下は今日、葬式代理出席から緊急で仕事を依頼されていた。しかし彼は「今日は用事がある」とだけ会社に伝え、自室の椅子に悶々ともたれかかっていた。

「はあ……………」

胸に燦る想いは全て、煙草を吸って誤魔化していた。

「……………ああ……………」

あの奇妙な少女に出会った日以来、日下はただの一度も笑うことができていない。ハンカチを差しだしてきた老婆や、余命僅かな少女のことが、どうしても、脳裏に焼き付き離れなかった。

「……………」

灰皿の上には白い筒が積み重なる。部屋中は煙草の匂いで満たされて、うっすらと白いモヤがかかっていた。

「……………こんな……………中途半端な……………」

あの老婆の善意を踏みにじった瞬間、胸に抱いた確かな罪悪感を、日下は恐れた。冷静になった今なら、あの日の自分を分析できる。人の不幸を食いものにすることで何とか見出しきった生の意味を、失うことが怖かったのだ。だからこそ、あの葬儀を終え鏡に映った、他者の不幸をあざ笑う自分の存在に、ひどく安心感を覚えた。その後も、小夜子の身に起こる不幸を愉快に感じていた筈だ。それにも関わらず、あの少女に余命があると知ったとき、自分はその事実を笑えていなかった。あのとき植え付けられた罪悪感が、芽生え、根を張り、絡みついていくような感覚に陥ったのだ。そしてそれ以来、他者のどんな不幸に対しても、快樂を見出すことができなくなっていた。

この先もこのままだとしたら、一体、何に生の意味を見出せば良いのだろうか。日下が強い苛立ちのまま何十本目の煙草に手をかけたそのとき、「ピンポン」と間の抜けた音が部屋中に響き渡った。急いでマスクを付けてインターホンを確認すると、

「お兄さん！ お久しぶりですわ！」

画面の向こうで、小麦小夜子がぴょんぴょんと跳ねながら、楽しそうに顔をのぞかせていた。

「あ、家にいてくれて良かったですわ！ とっても幸運でしたわ！」

玄関を開けると、自称世界一不幸な少女が、白い歯を満遍なく見せながらそう微笑んだ。

「一度来ただけでよく住所を覚えられましたね……なんの用でしょうか？」

「わたくしを病院まで送り返してほしいのですわ！」

「来た理由」が「送り返してほしいから」という支離滅裂さに、日下は早々に頭を悩まされた。

「すみません、理解が及ばないのですが」

「わたくしを病院まで送ってくださいませ！ 貴方と一緒にじゃないと、帰る気がおきませんの」

「……本当にそのためだけにここまで来たのですか？」

「はい。ちなみに病院にはこの住所を書き置きして出て行きました！」

それは暗に『ここで送り届けなければ面倒なことになりますわよ！』と脅迫しているようだった。万が一にも本当に小夜子が「帰る気」を起こさなかった場合、真っ先に疑われるのは日下である。実際に彼女がここに来たという事実がある以上、尚更に。

「分かりましたよ。病院までお供します」

小さくも末恐ろしいお嬢様を前に、日下は再び屈服した。

「……ただ、その前に」

「？」

「タオルを貸すので身体を拭いてください。泥だらけです。貴方今度はどこで転んだのですか？」

「何故、そんな、所謂『お嬢様口調』なのでしょうか？」

病院までの道のりを歩き始めたばかりのとき、日下は小夜子にそんなことを問いかけた。会ったばかりの頃はそれどころでなく、いつの間にか慣れてさえいたが、現代でその口調はあまりにも異質だと、改めて聞きそう思ったのだ。

「あら、そんなにかかしいでしょうか？ お嬢様って素敵ではありませんか？」

「まあ、他人と違うことを『おかしい』とするのなら、おかしいでしょうね」

学校では間違いなく浮くだろう。いじめの標的にされたつておかしくない。他人との差は「差別」につながると、日下は誰より理解していた。しかし、そんな残酷な言葉にも小夜子は笑って返して見せた。

「なら問題ありませんわ。わたくし、同年代の子と交流する機会がほとんどありませんでしたから。比較対象がありませんの」

「……そうですか」

日下はこのとき、余命持ちの入院患者である小夜子が、学校経験に乏しい可能性を自身が検討していなかったことに気がついた。

「それに、なりたいた姿に嘘を吐く方がよっぽど『おかしい』と、わたくしは思いますもの！」

「お嬢様が、貴方の『なりたいた姿』なんですか？」

「はい！ 可憐さの中にも揺るがぬ意志を持っていて、そして最後には必ず幸せを掴む、そんな物語の中のお嬢様たちは、わたくしの憧れですよ！」

小夜子はどこか誇らしそうに、胸を張ってそう答えた。

「なんというか、まあ、強い方ですね。貴方は」

日下は力の抜けたようにそう零す。

「わあ、ありがとうございます！」

その言葉に小夜子がバアと顔を明るくしたのと同時に、彼女の身体がふっと宙に浮いた。

「おわあ！？」

そしてそのまま盛大に尻餅をついた。見ると、彼女の足元に空き缶が転がっていた。

「い、痛いすわ……」

目の前で起こった彼女の不幸に対して、日下は一瞬、自らの身体の奥が熱くなるのを感じたが、それもすぐに冷めてしまった。そんな自らを虚しく思いながらも、日下は倒れた小夜子へ右手を伸ばす。しかし彼女がその手を取ることはなかった。

「……？」

何故か、彼女は座り込んだまま、不思議そうな顔で日下を覗き込むばかりだった。二人の間に奇妙な時間が流れていく。

「あの、どうしたんですか」

行き場を失った日下の右手は、ただ空を切るばかりだった。

「……いえ……なんでもありませんの」

小夜子はそう呟くと、何か思う所のある様子で、地面に両手を付けて立ち上がった。結局、日下のその手が取られることは最後までなかった。

「お兄さん、看護師さんからお聞きになっているのですよね？ わたくしの余命について」それは小夜子が転んでから五分後の、病院までの道半ばでのこと。彼女の唐突な問いかけに、日下は息を呑んだ。

「！……ええ、まあ」

歩みを止めることなく、ひとまず頷いてみせる。

「ふふ、そうなのですね！ そんなわたくしのこと、お兄さんはどう思いました？」

小夜子は瞳の中をキラキラと輝かせながら、日下の顔を見つめた。

「どうって……詳しいことは聞いていませんが、同情しましたよ。普通に。可哀想だなと」

余計なこととは言わず、日下は淡々と言葉を返すように努めた。

「……ふーん。そうなんですの」

すると小夜子は淡泊な反応を示し、プイッと顔を横に逸らした。

「あの、どうしましたか？」

何か気に障ることを言ってしまったのかと考えながら、そっぽを向いた彼女に目線を合わせる。

「……お兄さん、もっと嬉しそうにしてくれていると思っていましたのに」

「え？」

「だってお兄さん、不幸なわたくしのことが好きなのでしょう？」

「……………は？」

その言葉で日下の足が止まる。呆氣にとられ、ポカンと開いた口が塞がらない。そんな日下にはお構いなしといった様子で、小夜子は言葉を続けた。

「だってはじめて目があったとき、とっても素敵な笑顔を浮かべていらしたじゃないですか！」
そのとき日下の脳裏に、彼女と初めて会ったときの光景が浮かんた。池に落ちて泣きじゃくる彼女を見て嗤った自分、を見て笑った彼女の姿が。

「その後も、わたくしに不幸が起こる度、マスク越しでも伝わってくるほどの幸せを感じていたでしょう」

小夜子は「ちょうどあの場所でも」と、道の奥に見えたあの日の赤い自動販売機を指さした。日下は咄嗟に否定しようとするも、上手く言語化できず、無意味に口をパクパクと動かすことしかできなかった。

「……そ、それを分かっていて、何故私と一緒にいるのですか？」

ようやく絞り出せたその言葉は、小夜子の言い分を認めたに等しいものである。

「それはですね、わたくしの側で笑ってくれたのが、嬉しかったからすわ」

小夜子は両の頬を紅潮させながら、そう言って微笑んだ。本来なら可愛らしい筈のその笑みが、日下には得体の知れない化物のモノに思えてならなかった。

「全く意味が分かりません。なんなんですか貴方は」

「あら、ただの一人のお嬢様ですわよ！」

「お嬢様ではないでしょう」と返す余裕は、今の日下にはなかった。目の前の少女に全てを見透かされている、そんな感覚に背筋が冷えていくばかりだ。

「でも、今日の貴方からは、他者の不幸を自らの快樂にするのをよしとする、その気概が感じられませんわ。どうしてですか？」

先ほど手を差し伸べた際、彼女が不機嫌そうにしていた理由も、どうやらそこにありそうだった。前のめりで抗議してくる小夜子に対し、日下は諦めたように口を開く。

「……………何のことはありませんよ。今更罪悪感に囚われた、それだけのことです」

俯き、吐き捨てるように発したその言葉で、日下は自らの仕様もなさに惨めになった。

「……それなら」

小夜子が小さく口を開けて何かを言いかけたその瞬間、二人の前方から大きな声がした。

「やっと見つけたわ！　こんなところにいたのね！」

見ると、道の前方からあの日の看護師が駆け寄ってきていた。

「本当にこのお兄さんの所に行っていたのね。何度もご迷惑おかけして申し訳ありません」

看護師は丁重に日下に頭を下げると、小夜子の手を握り病院の方へと歩いて行った。「見つかったちゃいましたわ」とつまらなそうにこぼした小夜子は、特に抵抗することもなくそのまま引っぱられていった。

「またお会いしましょうね、お兄さん」

最後に振り向いた彼女の顔はにこやかだった。日下は「いえ二度とごめんです」と内心で呟き、彼女に背を向け歩き出した。

五

三日後

「見て下さいませ！ わたくし、白馬の上に乗っていますわ！ お姫様みたいですよ！」

「……どちらかと言えばそれは王子様では？」

目まぐるしく回る白馬やティーカップ。陽気な音楽が絶え間なくループする場内で、それに合わせてステップを踏むマスコットキャラクターたち。大きな賑わいを見せる真昼の遊園地において、小麦小夜子はメリーゴーランドに乗りながら、あきれ顔の日下幸成に手を振っていた。

日下はポケットに突っ込んでいたメッセージカードを取り出し、それを恨めしそうに見つめながら、昨日のことを回想した。

相変わらず葬式に出向く気にもならず、生活必需品を買うため家を出たその帰り、玄関のドアに白い封筒が挟まっていた。中を開けると一枚のメッセージカードがあり、その頭には「招待状」と書かれていた。

「……………は？」

日下はその内容に目を通し、頭を抱えた。

『招待状 親愛なるお兄さんへ。わたくしのお城へご招待しますわ。つきましては明日の休日の十二時に、下記住所までおこしく下さいませ』

因みに「下記住所」が示しているのはここ周辺に昔からある遊園地であった。何が「わたくしのお城」だ。そう思いつつ、日下は悩まし気にその「招待状」を見つめていた。

「……………」

あの少女が何を考えているのか計りかねていたのだ。

「いや。そんな義理はない。全くもってない」

彼女の不幸を嗤った借りなら既に返し過ぎている。「下記住所」のさらに下記に「もしいらっしやらなかったら何度でもそちらへ出向きますわ!」と添え書きしてなければ問答無用で破いていたところだ。結局十八回ほどゴミ箱に投げかけた末、観念して出向くことにした。そこには、日下なりの目的もあった。

そして今日の昼間、入場口付近で小麦小夜子と再会したのだ。彼女は両手を腰に当て「待っていましたわ!」と言わんばかりの堂々とした態度で立っていた。

「……なぜ、こんなところに?」

出会って早々、マスク越しでも分かるほどの疲れ顔を晒した日下は、至極真つ当な疑問を口にした。すると小夜子は、少し悩まし気な反応を見せた。

「えっと……ここの遊園地ってお城があるでしょう?　そしてお城と言えば、お嬢様と切っても切り離せない関係にあると思いませんか?」

小夜子は「そうでしょう?」と首を傾げながら同意を求めてきたが、さっぱり意味が分からなかった日下には、「どうなんでしょうね」と首を傾げ返すのがやっとだった。確かに入場口からでも分かるほどに大きなお城はそびえ立っているが。

「ですから一度は来てみたかったですわ!　ただ一人だと心細かったので、是非お兄さんと回ればと思ひまして!」

こちらの疑問を無視して、はきはきと言葉を並べる小夜子に対し、日下は一旦、これ以上の詮索を諦めた。そして仕方なく、今度は「分かりましたよ」と首を縦に振って見せる。

「……因みに病院の許可は取っているのですか?」

「いいえ!　でもいつものことなので問題ありませんわ」

それこそはぐらかしてほしかったと、日下は頭を抱えた。今からでも病院に連絡した方が良さだろうかと思ひつつ、ここに来ることを決めた本当の「目的」を思い返し、何とか踏みとどまった。

「それじゃあ行きましょう!　あ……よろしければフリーパスを買っていただけませんか?」

「本当に何をもって『わたくしのお城』だったんですか?」

遠慮がもはや欠片も残っていない。その我儘さだけは、どこか典型的なお嬢様のようなだった。

結局、日下はせがまれた通り小夜子の分のフリーパスを購入した。これは日下にとって「前払い」のようなものである。あの日以来、人の不幸を笑うことが出来なくなった自分も、不身体質の彼女と居続ければ、もしかしたら、今までの調子を取り戻せるのではないかと考えたのだ。彼女に言われるがままここに来た理由も、それが大半を占めていた。

そして現在。

「あ、次はあれに乗ってみたいですね！」

小夜子がメリーゴーランドを乗り終えてすぐ指をさしたのは、水上を高速で移動するウォーターライドだ。

「あんなに派手なアトラクション、大丈夫なですか？」

「ええ問題ありませんわ！ さあ行きましょう！ 今度はお兄さんも一緒に！」

小夜子がぐいぐいと強い力で日下の袖を引っ張っていったそのとき、『ぎばーん』と大きな音が鳴るやいなや、大量の水が二人の頭上に降って来た。

「び、びしょびしょですね……」

「びしょびしょですね……」

よく見ると、すぐ側に立てられていた看板に『こちら一帯水に注意！』と書かれていた。どうやらウォーターライドによる水しぶきに当てられてしまったようだ。

「ううう……まだ一つしか乗っていませんのに……」

「……なんというか、災難でしたね」

出鼻をくじかれ涙目の小夜子のことを、日下はまじまじと見つめていた。ついこの間まではこんな小さな不幸さえ愉快に思えたのに、今は身体が疼くような感覚がまるで起きない。日下の全身は、高揚するどころか冷めきっていく一方だった。実際冷や水を浴びているのだから当然ではあるのだが。

「……大丈夫ですわよ！ まだまだこれからですね！」

「？ はい、まあ、そうですね」

こちらに言い聞かせるような小夜子の口調に若干の違和感を抱きつつ、日下はとりあえず頷いてみせた。

「んー……この迷路、とんでもないですね」

小夜子が第二のアトラクションとして選んだのは「超巨大迷路」だった。曰く「服が乾かないうちは座るのが必須のアトラクションには乗れないから」だそうで、消去法で選ばれたのがこれだった。

「とんでもないのは貴方の勘です。なんで全ての選択肢を潰せるんですか」

当然日下も付き合うことになるのだが、かれこれ三十分間、進んでは行き止まりを繰り返している。

「か、可能性の全ては検討する価値があるのですわ……!」

疲れを隠し切れない小夜子は消え入るような声でそう呟いた。

「迷路においては別です。せめて血迷わないでくださいね」

出会った当初に比べて、日下もまた、小夜子に対して遠慮がなくなってきた。それ以上に振り回されている訳だから、罪悪感など微塵もなかったが。

「……とはいえ迷いまくったおかげで服が少しずつ乾いてきましたわ! 結果オーライというやつですわ!」

「せめて結果を出してから言いましょうよ」

結局迷路を出られたのは、それから三十分後のことだった。

「きゃああ!! この襖、血がついていますわ!」

「よくできてますね」

服が渴くまでには、もうしばらく時間が必要ということで、やって来たのはお化け屋敷。和風の作りの館内は、血跡の付いた襖や、祀るように飾られた無数の日本人形などで溢れていた。こういった場所に入りましたことのない小夜子は、始めこそ「興味がありませんわ!」と意気揚々としていたが、入って数分で既に何度目かの叫びをあげている。対して日下へ平気な様子で、冷静に館内を眺めていた。

「は、早く出ましょう!」

早足で歩き出した小夜子は、何かに躓き早々に頭から転んでいった。

「ツッ!! 痛いすわ!! 怖いすわ!!」

おでこを抑えながら慌てふためきつつ、小夜子は身を翻し、自らの足元を見る。そこには蒼白の生首が転がっていた。

「きゃあああああああ!」

そして座りこんだまま後ろにのけぞり、襖に激突した。

「お、落ちついてください。お化け屋敷とはこんなものです」

そう言って彼女に近づこうとした瞬間、小夜子がもたれかかっている襖から「ばきッ」と不吉な音がした。次の瞬間には血の付いた襖や近くにあった日本人形が一斉に倒れはじめ、小夜子はその下敷きになった。

「だ、大丈夫ですか！」

流石の目下も動揺し、小夜子の下へ駆け寄っていく。しかし特段重いものが倒れてきた訳でもないため、小夜子は覆いかぶさる襖から、ぬるりと自力で抜け出した。

「……どうやらケガはないようですね」

「はい。心配には及びませんわ」

それはそれとして怖かったのか、口調に反して目元は潤んでいた。

「……まあ、それなら良かったですね」

目下がそう呟くと、小夜子はどこかつまらなそうに眉をひそめた。

「……………いえ、まだまだですわ！」

「?……何か言いましたか……?」

「何でもありませんわ! さあ行きますわよ!」

そのまま意気揚々と歩いて行った小夜子は、先ほど躓いた生首に脚を取られ、再びすっ転んだ。

その後も目下は小夜子に振り回され続け、時刻は既に午後十六時。服もとくに乾き、次のアトラクションに向け意気揚々と園内に行く小夜子に対し、目下は入場口ではぐらかされたことを再度問いかけてみた。

「結局のところ、どうして私を誘ったのですか？」

「ここに来てみたかった」のも本心かもしれないが、それが全てだとは、目下にはどうしてもしえなかった。

「んー……そうですわね……」

悩ましげにしている彼女に「今度ははぐらかさないくださいね」と釘を刺す。

「別に嘘を吐きたい訳ではなく……ただ適切な説明も思いつかなかったので……あ、そうですわ!」

小夜子は「ひらめいた!」と言わんばかりに人差し指を上げて、にこやかに説明を始めた。

「出来ていたことが出来なくなったときは、『リハビリ』をするのだと病院で聞いたことがありますの。ですからこれは、お兄さんへのリハビリなのですよ！」

何が「そうですね！」だったのか。要領を得ないその説明に日下は怪訝な顔をした。

「ん〜！ ですから！ わたくしの可哀想な様子を見て、だんだんニヤニヤできるようになってもらおうということですよ！」

「誤解を招きかねないので止めていただけますか」

地団太を踏みながら主張する彼女に対して、日下は冷静に訂正を求めた。と同時に、このとき日下はようやく小夜子の真意を知った。目の前の少女は、自分がまた他人の不幸を笑える日を願って、こんな行動しているのだと。

「因みに遊園地を選んだのは、アトラクションごとに色々なトラブルが起こると踏んでいたからですよ！」

「ここに来てみたかったのも本心ですが」と小夜子は笑顔で付け加えた。

「……なぜそこまでするんですか？」

小夜子の行動について理解はできても、納得いかなかった。彼女と出会った回数は、今日を含めて三日間だけ。とてもじゃないが深い繋がりであるとは言えない。加えて「人の不幸を快楽に思う」その性質を、国崎のように正そうとはすれ、戻そうとはしないだろう。

思考回路が絡まり、頭を悩ませていた日下に、小夜子はあっけらかんと答えて見せた。

「あら、前にも伝えたじゃないですか。わたくしの側で笑ってくれのが、嬉しかったからですよ」

「確かに以前も聞きました。でもそんなことで……」

納得がいけない様子の日下に対し、小夜子は城内をキョロキョロと見まわして、一つのアトラクションを指さした。

「それじゃあ、場所を変えてお話ししましょう。折角なら、あそこで！」

指先には、場内の最も大きなアトラクションである、少し錆びれた観覧車がそびえ立っていた。

一周二十分の観覧車に乗り込んだ二人は、互いに向かい合うようにして座り合う。年季もあつてか、ゴンドラは小夜子よりも体重の重い日下の方に、想像よりも大きく傾いていった。

ゴンドラは頂上へ向かってゆっくりと上がっていく。窓の外からは夕焼けに照らされた遊園地が一望できた。一つのクレープを分け合うカップルや、意気揚々に友人をジェットコースタ

ーへ引っ張って行く学生、入り口のモニュメントで写真を撮る家族に、マスコットキャラクターたちと踊り合う子どもたち。皆それぞれが思うままに、幸せな時間を過ごしている。日下は他人の幸福を嫌う性格ではないが、その様を、どこか羨ましくは感じていた。

少しの間ぼんやりと外の景色を眺めていた日下は、ハッとした様子で小夜子の方へと顔を向け直す。そんな日下に微笑みつつ、小夜子は自らの身の上を語り始めた。

「……わたくし、産まれながらに病気を患っていました。おまけに不運なのかドジなのか、いつも問題を起こしてばかりでした。父から疎まれ、母から憐れまれ、病院の先生方からは同情されて……誰かを笑顔にしたことが無かったのですわ」

自称世界一不幸な少女、小麦小夜子の前では、誰もが沈んだ顔をしていたと言う。何故なら彼女は「不幸」で「可哀想」な子だから。

「両親は既にわたくしの下から姿を消しました。頼りのいない今のわたくしには、途方もない費用がかかる手術を受けるあてもありません。受けたとして、成功率はかなり低いそうですが」

「……絶対に治せない病気という訳ではないのですね。手術費はいくら程で……」

日下は無意識の内にそんなことを聞いていた。どれだけの額でも自分なら払えるのではないかと、ほんの一瞬だけ考えてしまっていたのだ。そんな義理も理由もないはずなのに。

「手術費なんて必要ありませんわ」

日下の思考を遮るように、小夜子はどこか強い口調で言い切った。

「だってあなたはあの日、不幸なわたくしのことを笑ってくださいだったのでしょ？ 他人のために自分を曲げる必要なんてないのですわ」

『だって、あんなに素敵な顔で、池の中のわたくしを笑っていたんですもの！』と、彼女は心から愛おしそうに告げた。そんな小夜子に対し、日下はただ圧倒されるばかりだった。

「……他人を理由に自分を曲げる必要なんてない……耳が痛いですね」

日下は一瞬俯いた後、すぐさま顔を上げ、小夜子の方を見つめた。

「私への『リハビリ』が成功したとして……その先に貴方は、何を求めているのですか？」

「あとほんの僅かな期間、貴方が貴方のまま、わたくしと共にいてくださる事です。わたくし自身が誰かを幸せにできた……その実感を、どうかわたくしにくださいませ」

それは迷いのない、真つすぐとした言葉だった。

「ああ、それと、強いて言うのなら、お葬式を開いていただきたいですわ。このままじゃ開かれるかどうか怪しいですから」

やんわりとした口調で付け加えられたその言葉は、おそらく本気のものではなかった。「そんな義理はない」と突っぱねられることを前提とした、羽のように軽い我儘だ。けれど、だからこそ、日下はその言葉を、何の理由もなく無下には出来なかった。「叶わない」と知りながらも口にしたその願いに、彼女の芯の部分があるのではないかと、そう思ったから。

「……私は葬式で人の死を悼んだことなど一度もありません。死人の不幸を喰って自らの生きる糧にしてみました。そんな私に頼むことではないでしょう」

日下幸成から小麦小夜子へ。何一つとして偽りのない言葉が贈られる。すると小夜子は、口元に手を当て「あは」と笑い零した。

「寧ろそうして欲しいのですわ。だってそんなに素敵なことってないでしょう？ 他者の不幸さえ自らの幸福に昇華させてしまうだなんて！」

小夜子は瞳を琥珀色に輝かせ、その中にはっきりと日下を映した。

「わたくしを思っただけ泣く人には出席していただかなくて結構です。わたくしの葬儀が開かれたら、それはそれは愉快に笑ってくださいませ」

「……それはなぜ？」

日下がそう問いかけたときには、ようやく観覧車が頂上を迎えた。そのときガラス窓から零れた橙色の光が、小夜子の全身を照らした。

「だって！ 身体がどんなに傷ついても、誰かがそれを笑ってくれるのならわたくしは救われますわ！ 池の水で濡れになったって、誰かがそれを笑ってくれるのならわたくしは満たされますわ！ どれだけ喉が渴こうが、誰かがそれを笑ってくれるのならわたくしは潤いますわ！ そしてわたくしが死んだとき、誰かがそれを笑ってくれたのなら、わたくしの生きた意味がそこに残るのです」

歪で異質なその告白を、彼女は胸を張って言い切った。

「わたくしは『わたくしゆえに』誰かを幸せにしたいのです」

それが小麦小夜子のエゴだった。柔らかな微笑む彼女と、溢れんばかりの暖かい色の光だけが、日下の視界を構成していく。それはほんの一時の間だったが、その光景が、日下の脳裏に焼き付き離れなかった。と同時に、日下はどうしようもないほどに、小麦小夜子という人間に惹かれてしまった。弱い身体の中に秘めた揺るがぬ人間性に。自らにとっての幸福を正しく理解し、そのためなら生き抜くことより死に切ることを選択できる、狂気のなまでの意思の強さに。それは今、日下が持ち合わせていないものだったから。

日下は立ちあがり、ゴンドラの中央へ行く。内部がぐらっと揺れて、今度は小夜子の座っている方へと僅かに傾いた。そして、日下は小夜子に向けて右手を差し伸ばす。

「分かりました。貴方の葬式は私が開きます」

それが敬愛する者へと送る、至上の敬意であった。

「まあ……まあ！ まあ！ とつてもとつても嬉しいですわ！ 是非よろしくお願いいたします！」

小夜子はその手を握った後、無邪気なままに日下へ抱き着いた。

ゴンドラは頂上からゆっくりと降りてくる。しばらくの間傾いていたそれは、ようやく平行になり、地上へとたどり着いた。

遊園地を巡り終え、小夜子は無事病院へと送り届けた頃には、既に夕日は落ちきっていた。彼女と別れ、寒空の下に帰路を行く日下は、自らの携帯電話の画面をまじまじと見つめている。そして、かじかんだ指先で、一つ一つの数字を押していく。何度も打ってきた数字の羅列を入力し終えるのに、今日はやけに時間がかかった。そして最後には、意を決したように通話ボタンに指を落とす。

「……もしも……うん、私だよ。明日会えないかな？……じゃあ、私の家で」

小麦小夜子と交わした約束を守るために一つ、どうしてもやらなければならないことが、彼にはあった。

六

「ふざけんな!!」

テール越しに身を乗り出してきた国崎真仁によって、日下幸成は胸倉を掴まれている。彼に出していたアイスコーヒーのグラスは倒れ、テールの上をじんわりと黒く染めていった。

「俺が言えた義理じゃない、ないけどよ！ 助けられるかもしれない命を見捨ててソイツの葬式を開く!? 馬鹿げてんだろ！」

日下は小麦小夜子と交わした約束について、あろうことかその全てを国崎に話したのだ。こうすることが、自分を「真人間」に近づけようとしてくれていた、国崎への敬意であり、決別だった。もう、彼が求めた「日下幸成」には決してなれないから。

「これは私と彼女の契約なんだ。私は救える命を見捨て、彼女の最大の不幸を食い物にする。そしてその代価に彼女の望みを叶えるんだよ」

「私がいつもやっていたことだろう」と、日下は付け加えた。

「黙れ!!!!!!!!!!!!!!いい加減にしろよお前! 未成年を唆して何が契約だ! 人として恥ずかしくないのかよ?!」

この場において「正しい」のは国崎真仁だ。日下はそのことを誰より理解していた。しかし日下は、正しくなりたいた訳でも、ましてや人間でいたい訳でもなかった。

「それでも。これが私なんだよ」

日下幸成はただひたすらに、「日下幸成」であることを願っていた。

真つすぐと見つめられた国崎は、彼を床に向かって突き飛ばした。

「……………もういい……………勝手にしろよ……………」

怒りに震え、それでいてほんの僅かに目元を潤ませながら、国崎真仁は彼の家を後にした。

ただ一人部屋に残された日下は、しばらくの間、先ほどの国崎の表情を思い浮かべていた。

「……………ひょっとして、ほんの少しでも惜しんでくれたのかい?」

こんな自分と決別することを、国崎は最後まで惜しんでくれた。その事実気づいたとき、テーブルに零れたコーヒーの上に、ぴよんと水滴が跳ねた。自らが涙を流していることを自覚した日下は、ひとまず洗面所へ布巾とハンカチを取りに向かった。

そうして洗面所の扉を開けたとき、備え付けの鏡に自らの姿が反射した。目元は腫れており、泣き止んですらいらない。それでもその口元は、どうしようもなく上がり切っていた。「友人^{ひのしたゆきなり}」を切り捨てざるを得なかった「友人^{くにさきまひじ}」の存在が、彼に痛いほどの快楽を与えたのだ。日下は、鏡にもたれるようにして、両手を当てた。

「ごめん、ごめんな国崎…………でも、やっぱり、これが、これだけが、私なんだよ」

どれだけ人と違っても。どれだけおかしくても。日下幸成にとつての『幸せ』が、視界の先に広がっていた。

一年後。

遺体を引き取る権利について、明確に定めた法律はない。小麦小夜子が生前に日下幸成を受け取り人として強く懇願していたこと……何より彼女の両親が行方不明なことも相まって、紆余曲折ありその身元は日下へと渡った。

葬儀の準備は少しばかり難航した。日下自身で葬儀を開くのは初めてだった。立場が立場なので受け入れてくれる場所を探すのも一苦勞である。ただ、それを押し通すだけの財力が彼にはあった。最終的に、ある教会と何とか契約し、式は無事執り行われることになった。わざわざ教会を選んだのは、生前の小夜子の要望によるものだ。「信者なのか？」と質問した際に、小夜子はこてつと首を傾げていたので、なんとなくの雰囲気を選んだのだろうと日下は考えている。

その日は雲一つない青空だった。オルガンで讃美歌が演奏される場内で、ただ一人の参列者である日下は思いめぐらせる。「小麦小夜子」の死は、彼女自身にとって不幸だったと言えるのか、否かについて。少なくとも彼女は自らの死に意義を見出して、前向きにこの世を去っていた。そんな彼女の死に対して、日下幸成は真に快樂を享受することができるのだろうか、と。

しかし彼はすぐに考えるのをやめた。考えるまでもなかったからだ。「世界一不幸な少女」を自称していた彼女にとつての最大の不幸は、「日下幸成」と出会ったことだ。もしもあのとき、あの坂で、すれ違つていたのが相思相愛を約束された白馬の王子様だったら。彼女は生きることに尽力し、死に抗つた筈だ。誰とも出会わなかったとしても、死に意義を見出すことは無かつただろう。小麦小夜子はとても強い女性だった。死を宣告されてもなお、呆れられるほど病室を抜け出していたのは、何のためだったのか。残り少ない人生を充実させるためか。それとも生きたいと強く願える何かに出会うためか。いずれにしろ、小麦小夜子は日下幸成と出会つたことで「生きる意義」ではなく「死ぬ意味」を見出してしまったのだ。一日でも長く生き続けられたのなら、あり得たかもしれない全ての奇跡に目もくれず。

「ははは。はははははは。はははははは」

そして自らの死をもって満たそうとした相手の、

「はははは。ははは」

[illegible]

通夜の祈りも、牧師の言葉も終わり、日下は献花として小夜子の棺に花を添えた。そこで、

$$\begin{bmatrix} \vdots \\ ? \end{bmatrix}$$

ただ、小麦小夜子の遺体の口角は、何度見返しても吊り上がっているままだった。